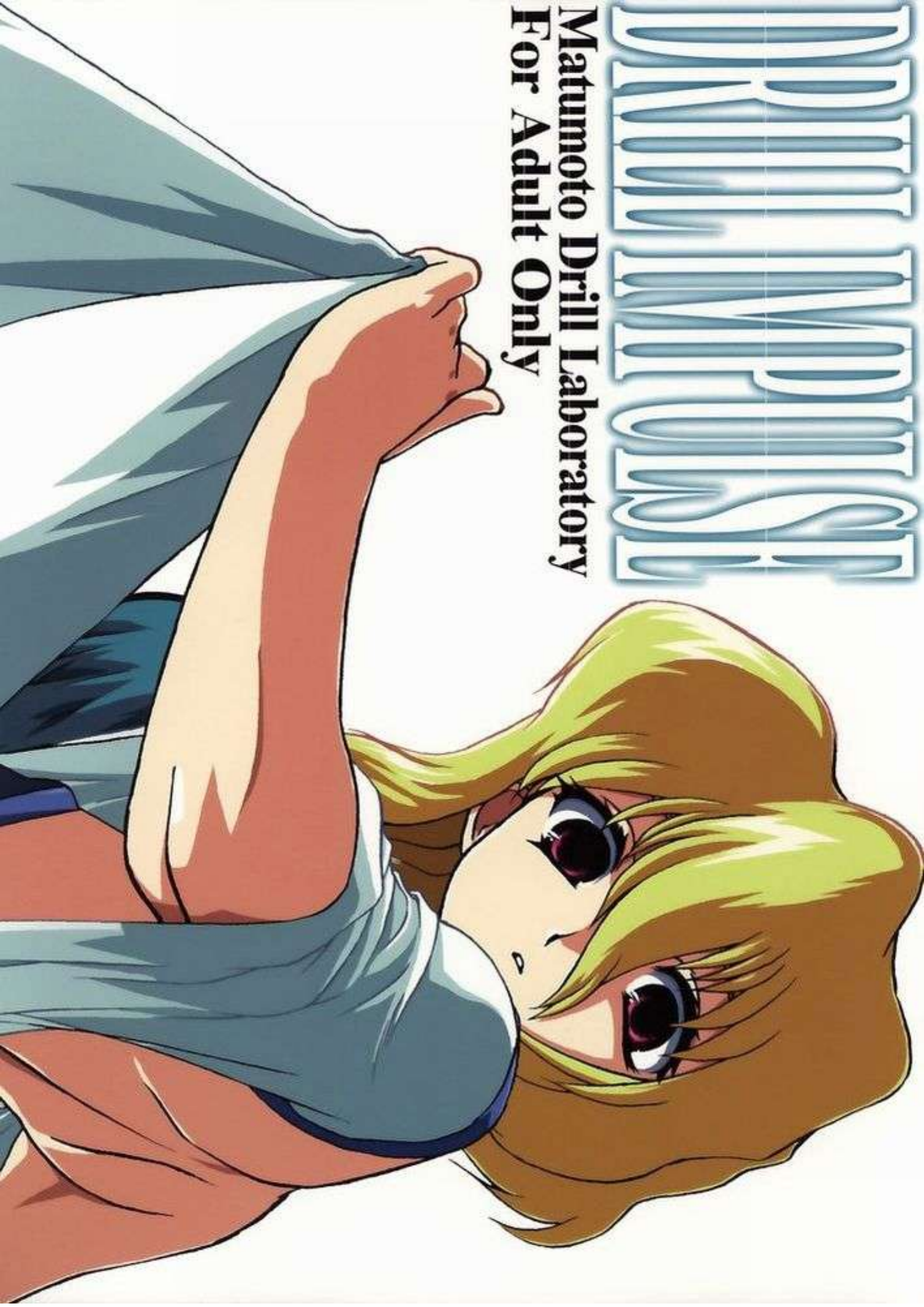


# DRILLMPPICST

**Matumoto Drill Laboratory  
For Adult Only**



死ぬの?...みんな、死ぬの？









































「その後、ムルタ・アズラエルはヤキン戦で戦死し、強化兵計画は一時消滅したわけだが」  
「イアンは額の汗をぬぐった。死線を潜り抜けてきた自分ですら、壮絶を感じる話だ。」  
「その後は君も知ってのとおり、ジブリール閣下が計画を再開し、今に至るといわけだ」  
「しかし……いや、聞きしに勝るお話ですな。戦中の非常時とはいえ、過酷な……」  
「いやあ、おれもホントかどうかはしらないんだけどね」  
「は？」

ネオの口元が綻びている。

「……」冗談を

「いやいや、そういう話もあるかもしれない、と言う話さ。ヤキン戦でも強化兵が戦局を左右したとは聞かぬ」

イアンはネオの顔を見た。この若造の仮面の裏はどんな顔なのか、と思う。

「思い出しました。イノセ卿には昔お会いしたことがあります。児童福祉協会の理事で、子供達がよく懐いておられておりました。その後もナチュラルとコーディネーターの掛け橋になるべく活躍されておられたと思います」

「開戦前に心臓病でお亡くなりになられたね。残念だった」  
「……」

「お、もうオナニーも終わりみたいだな。カブセルから出てくるかな。艦長、彼らに声をかけるかい？」  
「……」いえ、まだ見回る場所がありますから。これで、彼らには労ってやってください。

作戦成功は彼らがいなければおぼつかなかったでしょうから」

「敵さんも2年の間に新型じゃんじゃん作ったようだしね。これからだよ。艦長には期待しているよ」  
「一礼して踵を返し、退出する途中で艦長は足を止めた。」

「戦いと言うものは、勝つためなら何をしても許されるのでしょうか」  
「それは軍人としては甚だ不適切な発言だな。聞かなかったことにしよう」

「失礼しました」

艦長が出て行くのを見送り、ネオはモニタに眼を戻す。  
疲れたのか、無邪気に眠る三人が居た。ステラは下着も戻していない。

「精神値、正常です」  
ネオは報告に鷹揚に頷くと、歌を口ずさんだ。いつか流行った歌だった。

「やさしいその指が終わりに触れるとき。今だけ君だけ信じてもいいんだらう……」



松本ドリル研究所

絵・ながの〜ん  
文・なす

<http://chiba.cool.ne.jp/doriken/top.htm>  
[doriken2@mail.goo.ne.jp](mailto:doriken2@mail.goo.ne.jp)

この本の内容は全てフィクションであり、実在の人物、団体などとは一切関係ありません。また、本誌はサークル松本ドリル研究所の一存による刊行であり、印刷者など、他者に一切責任がないことを明記させていただきます。

18歳未満の方の視聴や購入をお断りいたします



**Matumoto Drill Laboratory**